第21回　日文研フォーラム

■

忘れられた兵士
戦争中の日本に於けるインド留学生

Forgotten Soldiers: Indian Students in Japan During World War II

■

グラント K. グッドマン

Grant K. Goodman

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長　梅原猛

● テーマ ●

忘れられた兵士
戦争中の日本に於けるインド留学生

Forgotten Soldiers : Indian Students in Japan
During World War II

● 発表者 ●

グラントK. グッドマン
Grant K. Goodman

発表者紹介

グラント　K．グッドマン
Grant K. Goodman

カンザス大学名誉教授

1924年生まれ。1948年プリンストン大学卒業。1955年ミシガン大学にてPh.D. 取得（日本近代史）。1962 - 1989 年カンザス大学歴史学部及び東アジア研究センター教授。アイルランド、イギリス、フィリピン、オランダ、ポーランドで客員教授として近代日本史を教える。1989年10月 - 1990年10月国際日本文化研究センター客員教授として来日。

主な著書：

○ Four Aspects of Philippine-Japanese Relations, 1930-1940 (New Haven: Yale University Southeast Asia Program, 1967)

○ Davao: A Case Study in Japanese-Philippine Relations (Lawrence: University of Kansas East Asian Series, 1967)

○ From Bataan to Tokyo: Diary of a Filipino Student in Wartime Japan: 1943-44 (Lawrence: University of Kansas East Asian Series, 1979)（南方特別留学生トウキョウ日記、編訳　髙橋彰、秀英書房、1982）

○ 24 in '44:Filipino Students in Wartime Japan (Quezon City: University of the Philippines Asian Center, 1985)

○ アメリカの日本元年 1945-1946（東京：大月書店、1986）

○ Japanese Cultural Activities in Southeast Asia During World War II (New York: St. Martin's Press (forthcoming))

四十五年前に第二次大戦争が終わりました。今日、幸いにその戦争の歴史は今の世界の大部分の人々の目から見れば、古代歴史と同じようになってきました。それに係わらず、僕は歴史学者として、その戦争のインパクトを今でも研究しております。特に日本とアジアとの戦争中の文化関係が、僕の専門です。例えば、近いうちに『戦争中、東南アジアでの日本の文化努力』というタイトルの本を、アメリカで英語で発表するつもりです。けれども、その本は東南アジアをほとんど全部含みますが、インドは南アジアですから、その本に含められていません。今日は戦争中のいちばん大事な、日本のインドに対しての文化努力を説明しようと思います。その上に僕の意見で、今まで多分、日印文化関係の立場からいちばん有効なプログラムを表します。その話を述べるのは大事なことだと思います。この話は少し面倒ですが、みなさんには出来るだけ簡単に語るつもりです。

最近日本でもアメリカでも、東南アジアでも、戦争中の日本におけるアジアからの留学生についての研究はよく進んでいます。特に「南方特別留学生」、あるいは「南特」について段々情報が増しています。約三百人の「南特」は、ビルマ、ジャワ、スマトラ、マライ、フィリピン、ボルネオ、セレベス、セラム、仏印、タイ国から、戦争中日本へ留学するために来ました。僕は前にそのフィリピンの

「南方特別留学生」についての本を書きました。

しかし、その大変野心がある予定と同時に、ほとんど知られていない予定は、インド系の留学生の予定でした。インド系という言葉は、インド人というよりも正しい言い方です。インド系の留学生はインドから来ていません。戦争中日本は、もちろん、インド本土を占領しませんでした。インド系の留学生は日本の占領した、マライとシンガポールのイギリスの植民地時代の在留インド移民の家族から選ばれていました。このマライ半島から徴募されたグループは、全員で45人で、スバス・チャンドラ・ボーズのインド国民軍の、東京士官、インディアン・ナショナル・アーミー・トウキョウ・カデッツと呼ばれて来ました。そして同じ時に日本で勉強させていました、「南方特別留学生」と同じようにすごくよく選ばれていて、一生懸命に日本語と日本の文化を習って、とっても真面目に将来の任務を考えていました。

一九八九年一月、インドで僕は二人の前インド国民軍の東京士官と詳しい面談をもつ珍しい機会がありました。もちろんその二人の、その時代の経験は彼ら自身にとってもユニークでしたけれども、彼らは戦争中、日本へ危ない旅行をしたグループの基本的な性格を語り、日本で勉強する意外な機会に対する反応を示し

てくれました。この二人は僕の目から見れば、非常に頭が良くて、すごく巧みで、言葉が上手いです。そして彼らは、その時代に一緒に住んでいた日本人に対する態度は、今日までにすごくいいです。この二人は、この今日の講演の目的に沿ってD大尉、（彼はエア・インディアの大尉に後でなりました。）それとSさんという二つの名前で呼ぶことにします。今日の話の内容はある程度までその二人の若くて、熱心で、愛国的なマライ在留インド系の日本への留学生の詳しい話によります。

D大尉は、一九二六年、マライのペラク州のヤシのプランテーションに生まれて、そのプランテーションのインド系の医者の息子さんでした。

Sさんは、一九二三年に生まれて、お父さんはマライのセランゴル州の、ビジネスマンでした。

両人のお父さんたちは、インドで生まれています。D大尉のお父さんは、インドからマライへ移民した時、もう医者でした。D大尉はお父さんと同じように医者になるつもりがありましたから、太平洋戦争が勃発する前に、医学教育をシンガポールで始めました。Sさんは英語での教育を受けて、英語での高等学校に戦争の前に入ったことがありました。その二人の言ったところによると、戦前、日

本も、日本人もほとんど知りませんでした。D大尉の思い出によると、彼のマライの田舎の街に日本人の商人と、日本人の散髪屋さんもいました。その他にD大尉は、子供の時のおもちゃが日本人の店から来たと覚えていました。けれども、彼の全くの初めての日本人に対しての印象は、マライ半島の日本の侵略の極悪からうけたものでした。D大尉の日本人の印象の第一番目は、マレーの中国人の無慈悲な虐殺を見た時でした。その上に勝利の感激に酔った日本人は、征服されたマレーの住民から最敬礼を要求して、住民に大声で分からない言葉を使って、命令していました。二人のよく知られた、キリスト教のインド系の医者を日本人が殺す前に、彼らは、彼ら自身の墓を掘る必要があったことをD大尉は、語りました。Sさんの経験から言えば、日本の兵隊は彼の自転車を盗んで、とってもギョッとさせました。

一九四二年、医学の教育をやむを得ず止めて、D大尉はマライ占領政府の敵の財産の管理部に、下位の文官として職を奉じていました。そしてD大尉の場合には、この仕事が彼を直接に日本人の世界に、初めて接触させました。一九四二年五月、日本人はシンガポールで、興亜訓練所という学校を成立して、その目的はマライの下位の公務員に日本語と日本文化を習わせるためでした。興亜訓練所は

軍政幹部大佐とブダン軍政の政策の建築家、ワタナベカオルという人の頭脳の所産でした。前の日本人墓地の近くにあるヨウチェン・ロードにあった、昭南、シンガポールですね、昭南興亜訓練所は八十四人のマライ系、中国系、インド系の士官を含めて開かれていました。

ワタナベ大佐の考えによると、その訓練所で十七歳と二十五歳の間の若いマライ国民を選んで、彼らを特別訓練して、日本の元のマライ政府の中階級の職員にするつもりでした。その目的でマライの総ての州は、いちばんいい二人か三人の公務員を選んで、訓練所で三カ月の集中的、軍補助的な訓練をさせます。昭南興亜訓練所の志望者を選ぶ方法では、試験はありませんでしたけれども、マライでの日本軍政の公務員は非常に慎重に、よく知られた志望者を選びました。選んだ志望者はD大尉のようにほとんど皆が優れて、あるいは金持ちの家族の出で、大部分は上級のエリートの学校、例えばラッフルズ・カレッジで教育されていました。ワタナベ大佐の計画によると、興亜訓練所の士官は、日本語と道徳的な訓練と精神的な見解を発達させる目的で、日本的な教育を経験するはずでした。ワタナベ大佐は、就任演説に、「士官が個人的な習慣を忘れて、日本精神の原理と、日本精神の意味を習わなければなりません」と言いました。それを達成するため

に彼らは、辛苦に耐えるのと、何も問わないで従うこと、も必要でしたと、ワタナベ大佐も言いました。

D大尉の思い出によると、軍政部の日本人の先生たちは、興亜訓練所でとっても丁寧でしたが、とても厳しくもありました。興亜訓練所の訓練プログラムは、実に日本陸軍の初めの年の徴募兵の訓練と同じようなものでした。そして、訓練所の雰囲気は非常に抑制されて、規律正しいものでした。朝から晩まで士官は精神の息をしました。強く、恐れることなく、日本の意味での本当の男にならなくてはならない、と日本人の先生がいつも教えていました。その先生の言ったとおりで、日本精神がなければ男でない。興亜訓練所での時間表は詳しくて厳しい。起床・号音は六時、士官は自分で布団を片づけて、早く歯を磨いて、イスラム教の士官も特別の部屋で朝の祈りを早くしました。みんなはカーキ色のユニフォームを着て、カーキ色のキャップを被って、外で点呼がありました。次の礼式は旗を挙げるので、東京の宮殿の方向に頭を下げるのでした。それからいつものようにラジオ体操をしてから、一緒に日本語で生徒信条を朗吟しました。生徒信条というのは、日本人とちょうど同じものでした。内容は規則の厳守、誠実、努力、体と心の訓練、節倹、共同、正直正義、日本帝国に忠義を主張しました。七時半

の朝食の前にトイレを含めて建物、建物の外も綺麗にしてから、四マイルのジョギングをしていました。朝のクラスは日本語、日本の歴史、日本の地理、日本の文化、数学、もちろん歌もありました。日本語の教科書は特別に日本精神と武士道を押し込む目的で書かれていました。英語は厳しく禁止されました。士官は英語を話せば罰金を払う必要がありました。午後は体育訓練と軍事訓練がありました。ある士官は熱帯地の太陽がギラギラと照りつけていましたから気絶しました。そういう人は手伝いを全然貰わないで、ほかの士官の体育と軍事訓練が終わってから二時間のランニングをするはずでした。同じように剣道、柔道、相撲の訓練の時、きちんとした態度をとらなかった士官は、同級生が終わってから練習を気絶するまで続ける必要がありました。五時半の夕食の前に旗を下げる礼式があって、それから食べる前にシャワーの時間がありました。一緒にシャワーを浴びるのは、この若いマレー半島の男にとっては新しい経験で、特にイスラム教のマライ系の士官の場合には、非常に恥ずかしいことでした。二十時三十分、もう一度点呼があって、二十三時電気を消すことになっていました。

その興亜訓練所の三カ月の訓練の一部分として、シンガポールの中で小旅行をしましたが、目的は日本帝国の光栄を士官に見せるのでした。例えばシンガポー

ルのフォード工場の中で、イギリスのパーシバル大将の降参したところを訪ねました。もう一つ見せた場所では、イギリスとオーストラリアの捕虜は苦しい労働をしており、彼らはマライ系、中国系、インド系の士官に、煙草を乞食のように乞いました。もちろんこれは植民地時代の逆でした。訓練が終りに近づいた日、卒業する前に全部の軍事品を背中に運んで、四十マイルの15時間のハイキングに行きました。感心なのは、訓練所の所長も、日本人の先生もみんな士官と一緒に歩いたことです。イギリスの将校であれば、多分自動車に乗ると士官たちは思いました。興亜訓練所の経験はすごく厳しいものであっても、この士官にとっては深い印象を残しました。D大尉と同級生がいちばん主に習ったのは、日本の頑張り精神と言います。その上に、日本人の軍人の先生の公約、忠義と行動は深く士官に影響を及ぼしました。若い彼らは、こういうような人を見たこともなかったのです。ですからのちにD大尉が日本勝利を信用したのは、よく分かることができます。

Sさんの一九四二年の経験はまったく違います。彼も学校へ行きました。彼の場合の学校はペナンのスワラジ学院、あるいは自由学院。そのスワラジ学院は東京から、日本政府で占領したシンガポールまで移動されたラッシュビハリ・ボー

ズさんの元に、前ペナン警察学校に設立されました。スワラージ学院の訓練は六カ月かかって、全部英語でしました。その学校の先生たちはみんなインド系でした、その目的はインド国家主義を発達させるつもりで、軍事訓練も教えていました。その学校の特典は将来学生がインドをイギリス植民地から開放するための、潜入行動の訓練でした。

一九四三年の真中ごろ、日本の占領地の東南アジアに在するインド人の内には猛烈な変化がありました。一番大事なのは、ラッシュビハリ・ボーズという一九一五年から日本に亡命し、日本人の奥さんがあって、日本の国民になっていましたインドの政治家で、東南アジアのインド人のリーダーとなっていた人のかわりに、一九四三年七月、潜水艦でドイツからシンガポールまで来たスバス・チャンドラ・ボーズがインド人の新しいリーダーになったことです。その時まで、インド国民軍の将校たちは、大体、ラッシュビハリ・ボーズをあまり信用しておりませんで、彼は日本陸軍と日本政府の傀儡としてみられていました。けれども、インド内地のカルカッタの自宅監禁から逃げたスバス・チャンドラ・ボーズは反対に直接インパクトを与えて、カリスマ的才能を発揮し、すぐ尊敬されました。一人のインド国民軍の将校は、スバス・チャンドラ・ボーズの印象をこういうふう

に書きました。「ボーズさんがシンガポールまで来ていた時、私は彼を非常によく見ていました。私はその前に彼には、会っていませんでした。そして彼のインドでの運動についてほとんど何も知っていませんでした。私は彼のスピーチを聞いてから、私に深い影響を受けました。ボーズさんの個性と、ボーズさんのスピーチは私をミスりましたと言えば間違いがありません。彼はインドの本当の状態を我々に説明して、初めてインドを、インド人の目で見ました」という話ですが、一度ボーズさん自身の言葉を一旦聞くと、すぐ彼を信用します。その上に、彼は非常に説得力のある議論もします。一九四三年七月のスピーチで彼はインド国民軍の将校にこういうふうに言いました。「私が今日あなた方にあげるのは、空腹、渇き、長途、行軍、苦しみ、と死です。けれども生死に私に従わせれば、私は勝利と自由の道に導きます。我々はインドの自由があるまでに誰が生きようと死のうと構いません。インドは自由な国になるのが必要です。我々はインドの自由のために何でもします。」

D大尉とSさんの両人はこのボーズさん、スバス・チャンドラ・ボーズさんの霊感的、刺激的ニューズをひとりひとり聞いていました。同時に東京行きの新兵徴募の報告を聞いていました。事実はボーズさんがスギヤマゲン陸軍参謀長官の

会議で、陸軍士官学校にインド人のインド国民軍の士官が入学する許可を貰いました。とにかくその噂の結果として、D大尉とSさんは愛国的な、熱烈いっぱいで、この機会に応じて、偶然にも、同じ日にシンガポールに着いて、インド国民軍の将校との面接を受けました。次の週スバス・チャンドラ・ボーズさん自身が彼らを面接しました。D大尉の話によるとボーズさんは彼と全部英語で面接して、前の日本語での訓練について聞いた時、D大尉はマラッカの興亜訓練所で第二番目の卒業生でいることを説明しました。賽は投げられたのです。すぐにD大尉はシンガポールの東京士官訓練キャンプに割当てられました。このキャンプは訓練する場所でした。Sさんのボーズさんとの面接はちょっと違いました。ボーズさんの質問はSさんがこんなふうに覚えています。「君は陸軍に入りますか。戦えますか。敵と戦争できますか。インドまで送られたら降参しますか。訓練を生き残りますか。」その質問にSさんの返事は、「先生、僕はインドのために何でもします。先生、あなたが選んで下さい。先生、何処へ行っても、何をしても構いません。」そして彼も同じ東京士官訓練キャンプに参加しました。

前に言ったように、スバス・チャンドラ・ボーズはこのキャンプの士官をみんな、彼自身が選びました。キャンプの寮はシンガポールのギルステッド・ロード

のバンガローで、インド系の士官は一つの部屋に六人か七人いました。日本人の女性は日本語を教えて、日本人の男性は体育訓練を指導して、インド国民軍の将校は政治を教え込むことと、インドの歴史を教授しました。特にインドの歴史は、マレーで教育された士官たちにとって、ほとんど新しい話題でした。この東京士官訓練キャンプは三カ月で、その後で十五日間の休みがありました。一九四四年二月十八日、ウラル丸で士官のグループは（三十五名）（後十名）日本へ出帆しました。アメリカの潜水艦の危険のためにウラル丸は護送船の一部分として、ソンクラ、マニラ、台北、五島諸島の回り道を通って門司まで着いて東京までに四月七日着きました。門司から東京まで汽車で行って、東京世田谷区上北沢の新しく建設された、弘道学院に入りました。あちらでの準備訓練を終わってから、インド国民軍の将校になるために士官は、みんな日本の陸軍士官学校と陸軍航空士官学校に入学するつもりがありました。

一九四四年四月から十一月の終わりまで、その弘道学院は彼らの寮であり学校でもありました。ここで一人の士官は個人の部屋をもらい、部屋の設備はベッド、衣裳ダンス、机、椅子と電気ヒーターがありました。が、一九四四年の日本の電気は足りませんでしたから、電気ヒーターはみなが自発的に遠慮しました。食事

は日本食だけで、味噌・豆・ピーマン・ご飯・魚少しと、たまに馬の肉もありました。寮で少なくていちばん小さい士官は大きい同級生と食事を分配していました。東京の滞在の初めにインド留学生は毎週牛乳のびん一本と卵一個をもらいました。けれどもインド士官のために日本人の幼児と若い子供たちは牛乳と卵を失ってるということを聞いてから、インド士官は自由意思でそれを断りました。日曜日、インド留学生は自由に弘道学院を出てもよろしかった。休日の時間はほとんど全部食べ物を見つけるために過ごしました。けれども、食べ物が充分に当たらなくてもインド士官は決して日本人に不平を言いませんでした。インド人の士官たちは、日本の戦争中のたくさんの問題にすごく同情しました。それはほんとに「南特」の場合ととっても違いました。インドの士官の態度の原因のある部分は、彼らの日本人の我慢に対する感嘆で、もう一つは、彼らのスバス・チャンドラ・ボーズにインドの将来の自由のために日本で出来るだけたくさん習う約束をしたことでした。

D大尉とSさんは弘道学院での経験をすごく褒めました。弘道学院の学長さんは傷ついた前兵士で、厳しい訓練を行っていましたけれども、本当の紳士であり、とっても親切という言葉を使いました。寮にはいつも医者がいて、大勢の先生も、

寮に住んでいました。日本語を教える他に、数学、科学と日本の歴史と文化を教えられていました。インド士官はよく遊山旅行をして、江ノ島、鎌倉、日光、富士山そして長野湖スキー場も訪ねました。つまり弘道学院での訓練は素晴らしくて、インド留学生はみな非常に感心しました

一九四四年十月、スバス・チャンドラ・ボーズは東京まで来ました。インド士官はみんな羽田空港まで彼の飛行機を迎えに行きました。けれども、その飛行機は非常に遅れてきました。インド人が待っている間に、東京への空襲が始まりました。その後ほとんど毎日ありました。ボーズさんは十一月二十二日まで滞在して、一日おきにインド留学生と会っていました。一度彼は、表向きは、検査のために上北沢の建物を訪問して、裏で士官に食べ物の贈り物、チーズ、カレー、ビスケット、ポテトチップを渡しました。留学生はその親切に深く感謝してボーズさんを、前よりも尊敬しました。

東京でのインド士官とボーズさんとの人間関係はすごく親しくて、大いにエモーショナルでセンチメンタルでした。今日までにD大尉とSさんは自分の財布にボーズさんの、彼らにあてたネタジからの書簡と毎日の祈りを持っています。その内容はもちろん英語です。東京インド士官へのネタジからの書簡。

留学生たちへの祝福

親愛なる少年たちよ

諸君は常に私の心の中にあり、

諸君を誇りに思い、

諸君を信頼している。

私は、諸君が自由インドとなっているインドに戻る日、つまり諸君がインドの独立の守り手として立派な兵士として帰国する時を待ち望んでいる。

諸君は日本のおける自由インドの代表である。諸君は日本で自分自身を自由インドの戦士として鍛えるためにいる、日本にいる間、諸君は日本の文化と文明の最高のものを摂取して欲しい。

諸君がインドの偉大さと光栄の守り手であることを憶えていて欲しい。

ジャイ・ヒンド

スバス・チャンドラ・ボース

毎日の祈りの方はこうです。

日常

私は常に自由インドに忠誠を尽くす。

私は常にネタジ・スバス・チャンドラ・ボースに忠誠を尽くす。
私は常に言葉と行動において純粋である。
私は常にすべてのインド人を兄弟として接する。
私は常に最初から最後までインド人であることを忘れない。
私は常にインドを代表していることを忘れない。
私は常にわが国が私の行動で判断されることを忘れない。
私は常に自由インドの名前に値する礼儀にかなって身を処すことを忘れない。
私は常に祖国の名誉と尊厳を支持する。
私は常に祖国のためには全てを、生命を捧げる用意がある。
万能な限りなく慈悲深き神よ、私に勇気と強さを与え、ネタジと自由インドの信頼される僕として花開かせ給え！
インキラブ　万歳！
自由インド　万歳！
ネタジ　万歳！。

ボーズさんは弘道学院を訪問して、教室の中の講演と若者の訓練ぶりを聞いてから、彼はみんなのインド士官と座って、彼らにこういうふうにいいました。

「君達は私の息子たちです。私には息子がいません。君達は私のいちばん切望している自由インドのために全てを捧げましたから、私の息子よりも大切にします。」同じ時にボーズさんは、こういうふうにも言いました。「私は君達の国の将来が非常によくなることを確信します。けれども、敵を殺すために敵を嫌うことは必要です。君達はこの戦争を戦うために、イギリス人を嫌わねばならないのは分かると思います。」日本人に対してボーズさんの言ったことは、「我々は日本人と一緒に失敗しようと成功しようと」です。東京のインド士官のうち一つの話によると、ある日、東条大将はどこかでボーズさんを紹介する時に、「ボーズさんは将来インドの大統領、あるいは将来のインドの総理大臣であります」と言ったそうです。けれども、D大尉とSさんの語るところによると、ボーズさんはその紹介にすごく反対しました。「誰も私をインドの大統領として任命しません。その上に私は私自身を任命しません。それはインドの国民の責任です。私はインド国民の奉仕者です。」

一九四四年十一月、みんなのインド士官は弘道学院を卒業して、日本人の候補者と一緒に陸軍士官学校の入学試験を受けました。ほんとに成功したのか、そうでなかったかは分りませんが、インド士官はみんな試験を合格しました。D大尉

を含んで十人はパイロットの訓練を受けるために陸軍航空士官学校に入って、他の士官は陸軍士官学校に入りました。彼らは初めて陸軍士官学校内の寮に滞在した外国人でした。インドの士官は両方の学校で一九四五年一月から訓練を受けました。陸軍士官学校の場合には有名な第六十（期）のクラスで最後でした。D大尉とSさんは日本の陸軍士官学校と陸軍航空士官学校の教育を、前に言ったように、すごく褒めました。その他に両人は、日本人のインドの自由の戦いに対しての態度もよく褒めました。例えばSさんの思い出によると、士官学校で五人のフィリピン留学生、六十人のビルマ留学生と百人の中国留学生は、みんな士官の訓練を受けていました。けれども、彼らと日本人とは食事からしても別でした。けれどもインドの士官は日本人の士官と一緒に同じ訓練と同じ食事を貰いました。もう一つは士官学校でインドの士官だけが自分の別のバッジを帽子に付けていました。そしてインド国民軍の士官に対しては、士官学校の外へ出掛けた時、日本の下士兵と日本の将校が彼らに敬礼しました。Sさんの意見では、インド留学生の訓練は日本人の訓練と丁度同じでしたから、「南特」の訓練よりもよかった。そしてSさんの考え方によると、理由は日本人がインド人、スバス・チャンドラ・ボーズとインドの独立を非常に尊敬していたからです。一九四五年八月十五日

に戦争が終わってから、次の日、日本陸軍は、インド士官に士官学校が閉鎖することを説明して、建物をすぐに空にするつもりですと言いました。インド留学生は自分で近くにある工場を臨時寮として使いました。アメリカの進駐軍が入って来た時、彼らはインド人に同情していました。我々アメリカ人がイギリスとともに戦えなかったら、いま我々は自由でないのだから、と言いました。

一九四五年十一月、インド留学生はアメリカの飛行機でマニラまで行き、イギリスの軍艦に乗り換え、そこで彼らは突然に罪に問われた。協力者として香港のスタンレー刑務所に三ヵ月、独房監禁にいました。やがて四十五人全員はインドに止むなく帰らされて開放されました。もちろんこのインド系の男たちは一人も大人としてインドを前に見たことはなかった。家族はみんなマレーとシンガポールにいました。けれどもそれにかかわらずイギリスの軍事政策は彼らをインドへ送りました。

僕のリストを見ればわかりますが、十七人が今でもインドに住んでいます。十一人はマレーとシンガポールにいます。五人はイギリスに住んでいます。一人はブルネイ、もう一人はオーストラリアに住んでいます。

この話には、気をつけなければならない点がたくさんありますと思います。第

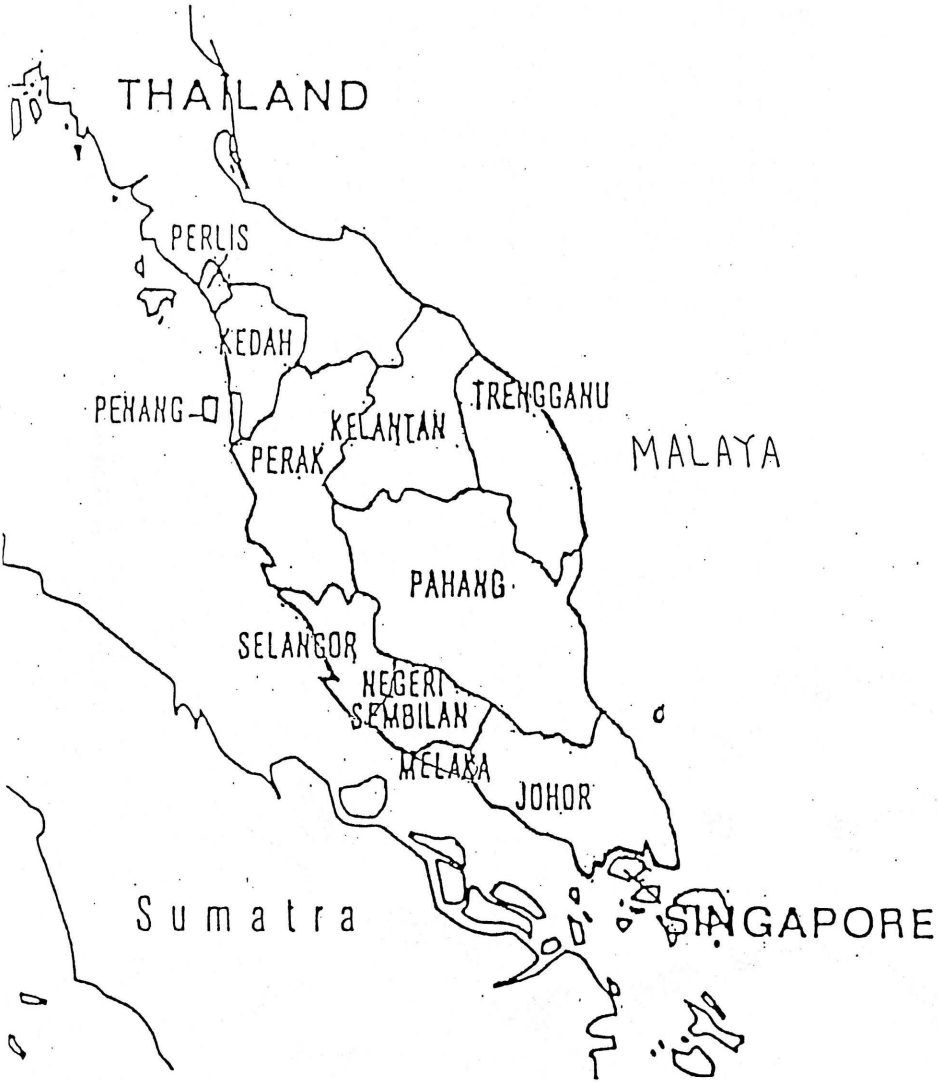
一番目はこのインド士官の身が完全に約束されたものだったことです。一方で彼らはスバス・チャンドラ・ボーズ、インド国民軍、インドの自由を約束され、同時に日本での勉強と、日本人の上官に等しい身分が約束されていました。僕の分かる限りで、彼らは決して少しも揺らいだことがない。D大尉によって、日本の降参する日までに、彼と彼の同じインドの士官は日本の勝利を決して疑いませんでした。例えば大部分の「南特」の場合には、秘密短波のラジオを聞いて、連合国の放送局のニューズをよろこび、本当の戦場の状態を分かっていました。けれども、インド留学生は他の国のニューズに全然興味なかったらしい。だれもそれを、D大尉の言葉では、「我々は幸福の夢に耽らされました。我々は最後の日まで、日本の勝利を信用しました。誰も、それを疑いませんでした。」もちろん、その考え方は、ボーズさんが士官によく言った日本についての意見と直接関係がありましたでしょう。ボーズさんが彼らに説明したことは、日本の勝利がインドの独立を保証するということでした。そしてボーズさんのカリスマ的な性格の影響で、インド留学生は彼の言葉を疑いませんでした。

その他にインド系の士官の日本での教育に対しての態度を見ると、彼らは非常に熱心で、従順な反応を示しました。訓練は厳しいものでしたけれども、D大尉

が、『ためらうことなく、その厳しさを受け取りました。ネタジの命令によると、「日本へ行って、最高のものを受け入れなさい。」我々はそういうふうにしました。誰も不平を言いませんでした。誰も疑いませんでした』と言った。

その話を聞くと、別に二つの点が非常に大事でしょう。一つは、日本がマライに対して行った征服のショックでした。もう一つはその征服の影響の結果として、日本の陸軍はインド人に負けないように見えました。同じようにインドの士官は、不道徳なイギリス人から、そして人間以上の性質を持つボーズさんのために、インドを開放する目的で、日本の陸軍の軍事力が必要だと思いました。日本軍が負けて、日本軍の元のインド国民軍は分解し、ボーズさんは戦争の丁度終わりで、飛行機の衝突によって殺されました。よく知られているように、ガンジーとネールは平和的にインドの自由を一九四七年にかちとりました。もちろんその勝利と、四五人の戦争中の日本におけるインド人の留学生との直接関係がありません。それにかかわらず、彼らは一生懸命に日本で勉強しましたから、その一九四五年の後の平和的な世界にすごく重要な貢献をしました。この異常な四五人のインド青年は、今まで、歴史学者の注意を引きつけませんでした。僕の意見により、文化史学者は、特にこの話に気をつけるはずです。第二次大戦の日印政治と、軍事関

係の重要性は薄らいでいますけれども、その時代の日印文化関係を研究する立場から、この偉大な留学生のプログラムを見ると、その利益は今まで続いてることがわかります。本当にその戦争中、日本におけるインド留学生への日本の文化のインパクトはすごく深かった。戦争中であっても、日本の政府と日本の陸軍は非常に利口にこのプログラムを総指揮して、この留学生たちに敬意を持って遇しました。その上に、その時代の日本の普通の国民も、留学生に対しての態度は、大体すごく親切でした。それは戦争中のインド留学生が今日までに、彼らの日本での経験に非常によい影響を残しています。この話から、今の日本は、何か学ぶことができますでしょうか。


THAILAND
PERLIS
KEDAH
PENANG
PERAK
KELANTAN
TRENGGANU
MALAYA
PAHANG
SELANGOR
NEGERI SEMBILAN
MELAKA
JOHOR
Sumatra
SINGAPORE

NETAJI'S EPISTLE TO THE INDIAN CADETS IN TOKYO

My Dear Boys!

You are always in my thoughts.

I am proud of you.

I have faith in you.

I look forward to the happy day when you will return to India — it will be AZAD HIND when you return — as full-fledged Soldiers and as guardians of India's Independence.

You are AZAD HIND'S representatives in Nippon.

You are in Nippon to train yourselves to be Warriors in Azad Hind.

While you are in Nippon, imbibe all that is best in Nippon Culture and Nippon civilisation.

Remember that you are the custodians of the Glory and greatness that IS Hind.

JAI HIND!

SUBHAS CHANDRA BOSE.

4th July, 1944.

DAILY PRAYER

I shall always remain faithful to AZAD HIND.

I shall always remain faithful to NETAJI SUBHAS CHANDRA BOSE.

I shall always remain pure in thought and in deed.

I shall always regard every Indian as my brother.

I shall always remember that I am an Indian first and Indian last.

I shall always remember that I am a representative of India.

I shall always remember that my nation will be judged by my character and conduct.

I shall always conduct myself in a manner worthy of the fair name of AZAD HIND.

I shall always uphold the honour and dignity of my country.

I shall always be ready to sacrifice everything, even my life, in the cause of my country.

May God Almighty, in His infinite mercy, grant me the courage, strength and spirit of sacrifice to make myself a worthy follower of Netaji and a true and faithful servant of Azad Hind.

INQUILAB ZINDABAD!
AZAD HIND ZINDABAD!
NETAJI ZINDABAD!

INA TOKYO CADETS AS OF 1987

Name	Address
Mr. Annamalai R. M.	30, Ananda Aragam New Town, Karaikudi 623 001 Ramnad Dist. Tamil Nadu, India
Brig. Attar Mohamed	Died in helicopter crash in Pakistan.
Mr. Anup Singh Kumar	Deceased
Air Comdr. Benegal R. S.	11/6-C Jogupalyam 1st Cross Cambridge Road 2nd Cross Ulsoor, Bangalore 560 008 Karnataka, India
Mr. Bimol Dev	Deceased
Mr. Bishen Singh	Killed en route to Japan when ship was sunk by enemy action.
Mr. Chaterjee S. K.	Deceased
Mr. Chowdhury N. G.	27, Jalan Setia Bistari Bukit Demansara 50490 Kuala Lumpur, Malaysia
Capt. D. Dasan	8 Angod. Street V. P. Colony, Ayanavaram Madras 600 023, India
Mr. Doraisamy K.	10 Gopal Dass Road Madras 600 002, India
Mr. Dutta A. R.	Living in London c/o S. B. Sharma
Mr. Ganapathy V.	Unknown
Mr. Ganapathy G.	Deceased
Mr. Ganarajan D.	11, Camac Street Calcutta 17, West Bengal India
Mr. Gandhinathan M.	56 Jalan Terasek Bangsar Baru 59100 Kuala Lumpur, Malaysia
Mr. Ghosh A. K.	20 Jalan 14/56 Petaling Jaya 46100 Selangor, Malaysia

Mr. Gandhi Dass M.	Deceased
Mr. Gupta	Deceased
Mr. Harbans Singh Kumar	A.E. International Pvt. Ltd. PO Box 3610 New Delhi 110024, India
Capt. Karmaker B.	C-3 Shyamali Ranchi 2 Bihar, India
Mr. Karmakar S.	K 2/7 Cross Road 14 Telco Colony Jamshedpur 4 Bihar, India
Mr. Krishnan C. P.	c/o C. P. Narayanan
Mr. Karuppiah N.	3-1-B Veerasamy Road Singapore 0820
Capt. Menon K. D.	6 Kasturi Colony Cathedral Madras 600 006, India
Mr. Meyappan P. L.	Block B, Jalan Kukoh #16-43 Singapore 0316
Mr. Meyappan R.	4/77 M I G Colony Vidyavihar East Raja Wadi, Ghatkopar Bombay 400 077, India
Brig. Mitra P. K.	Deceased
Mr. Mukherjee N. C.	Happy Apartments M1-2 Jalan 17/13 46400 Petaling Jaya Selangor, Malaysia
Mr. Natarjan V.	Block 6, Ghim Moh Road #07-198 Singapore 1027
Mr. Nachiappan V.	Jai Hind House Ramnad Dist. Nachiapuram Pin 623 207 Tamil Nadu, India

Capt. Narayanan C. P.	35A Crescent Road Kingston Upon Thames Surrey KT27 RD United Kingdom
Mr. Naidu P. B.	31 Prashant, Dawood Bagh Rd. Andheri West Bombay 400 058, India
Mr. Nindra Sukbir Singh	Ropar Thermal Plant Ropar City Punjab, India
Mr. Navaratnam K.	Deceased
Mr. Rabindranath	Deceased
Mr. Rajan	Deceased
Maj. Ramakumar M. K.	302 Sector 351 Chandigarh 160 036 India
Capt. Ranjit Dass	12 Adyaman Society S.V. Road, Vile Parle (W) Bombay 400 056, India
Mr. Prosper Robert	Electrical Dept. Tutong, Brunei
Mr. Sekhar R. K.	R.R. Nursing Home No. E 2/44, Block - 2 Kannadasan Nagar Madras 60051 Tamil Nadu, India
Mr. Sharma S. B.	117 Thomson Green Thomson Hill Estate Singapore 2057
Mr. Sharma S. P.	134, Sussex Road Harrow, Middlesex HA1 4NB United Kingdom
Mr. Sharma S. V.	1 Kelceda Close London NW2 7HL United Kingdom
Mr. Thevar S. L.	Unknown
Mr. Virik H. S.	23, Lady Game Drive West Hillara 2071 Sydney, Australia
Mr. Virik S. S.	5 Lorong Setia Jasa Empat Bukit Damansara 50490 Kuala Lumpur Malaysia

発表をおえて

残念ですが、今までに日本の学者は、第二次大戦争中に日本が占領した東南アジアでの日本の文化政策と文化行動を余り研究した事がありませんでした。

僕は、その時代を自分で経験し、日本の近代文化の歴史の専門を開発したから、こういう様な問題に非常に興味があります。

日文研では、僕の研究は自由でしたから、この講演の話題を詳しく勉強する事が出来て、とても嬉しかったです。ですから、この講演を日文研フォーラムで話すのは、本当に有り難い事です。

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー　A．トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン　J．ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ　C．ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」
⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」

⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
14	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
15	元. 9.12 (1989)	ハルトムートＯ．ローターモンド（フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮（中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
17	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」

19	2．1．9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2．2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2．4.10 (1990)	グラント　K．グッドマン（カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K.GOODMAN 「忘れられた兵士 －戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2．5．8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ（スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2．6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
24	2．7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師 Li Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇 －文化伝統からの一考察－」
25	2．9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
26	2.10.9 (1990)	ケネス・クラフト（リハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド　M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. Fatthy 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル　フィアラ（カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel Fiala 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2. 12 (1991)	アレクサンドル　A.ドーリン（ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. Dolin 「ソビエットの日本文学翻訳事情 ー古典から近代までー」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ　P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. Kuitert 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 ーゲオルグ・マイステルの旅ー」

○は報告書　既刊

****
非売品
発行日　1991年３月29日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2222

問合先　国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課
****
©1991　国際日本文化研究センター

■ 日時

1990年4月10日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部